公益財団法人岡田文化財団助成事業

第四十一回企画展

きらめく亀山刀剣鐔

―国助・正吉・国友・間―

亀山市歴史博物館

ごあいさつ

亀山市に伝わる日本刀と鐔は、地域の江戸時代の歴史や文化を伝える資料です。この地は、歴史の中で長らく城があり、大名と家臣が暮らしていたこと、江戸時代に入っては大名の所替の地であり、最後の所替から一五〇年余り同じ大名が城主となり明治時代を迎えたことなど、地域のもつ複合的な要因により、現在まで日本刀や鐔が伝えられてきました。

亀山市歴史博物館でも、亀山ゆかりの日本刀と亀山鐔を所蔵しています。日本刀では、亀山城主石川家の家臣の家に伝えられてきた日本刀や、ＧＨＱによる接収刀剣である赤羽刀などがあります。その中には、初代が伊勢国亀山生まれとも伝えられる刀工の河内守国助、亀山城主石川家の抱え工である粟田口正吉といった日本刀があります。亀山ゆかりの刀工が作刀した日本刀とは、どのような姿であったのか、その形や刃文などをお楽しみいただければと思います。

また、鐔では亀山鐔という作品群が残されています。特徴的な砂張象嵌という技法を用いた作品で、国友派や間派の鐔工が作鐔したものです。亀山という地名を冠した亀山鐔をお楽しみください。日本刀や鐔など、今に伝えられて来た江戸時代の香りともいえる作品を楽しんでいただきながら、地域に積み重ねられてきた歴史を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、ご協力をいただきましたご所蔵者をはじめ、ご教示、ご協力をいただきました皆様に厚くお礼申し上げます。なお、本企画展は、公益財団法人岡田文化財団の助成を得ています。

令和五年九月

亀山市歴史博物館

目　次

ごあいさつ　1
凡例　2
1　亀山ゆかりの刀工　―　粟田口正吉　―　3
2　亀山ゆかりの刀工　―　国助　―　7
3　亀山藩の武士と刀　13
4　亀山と赤羽刀　25
5　亀山ゆかりの刀装具　―　亀山鐔　貞栄　―　31
6　もうひとつの亀山鐔　―　間鐔　―　35
解説　40
主な参考文献　44
掲載資料一覧　45

表　目　次

表1　亀山在城以後の松平家と国友派対応表　38
表2　亀山鐔　国友派（正栄・貞栄）・間派の特徴　38

凡　例

・本図録は、第四十一回企画展「きらめく亀山刀剣鐔　―国助・正吉・国友・間―」（令和五年九月三十日から十二月十日まで開催）における展示図録として作成したものである。

・本図録で使用した記号の意味は、左記のとおりである。

　○　市指定文化財

・本図録に掲載した写真は、左記のとおり、撮影および協力を得たものである。

　1　当館蔵
　25・26　名古屋市博物館より協力を得た。
　2・4・12・15・16・19・27～29・31～39　中川由莉（当館学芸員）撮影
　3・10・11・13・14・17・18・30　小林秀樹（当館館長）撮影
　そのほかは、業者委託により撮影した。

・刀剣の写真は、全体の表・裏、表の鋒・表の茎・裏の茎（銘文のある場合）を掲載した。表・裏を掲載するものは、左を表・右を裏としている。

・鐔の写真は、右を表・左を裏として掲載した。なお、鐔は、鐔工銘と小柄櫃孔・笄櫃孔の位置により、表・裏を判断しているが、これによりがたい場合は、図柄によって表・裏を判断している。

・刀剣・鐔の銘文は、常用漢字による表記とした。また、銘文中の改行は「／」で表記した。

・解説文に記載した翻刻文は、左記のルールで表記した。

　・花押は（花押）とした。

　・補注するも疑問の残る場合は（　カ）と注記した。

・本図録の執筆は、中川由莉（当館学芸員）が担当した。

・表紙の作成は、大澤亮二（当館職員）が担当した。

1　亀山ゆかりの刀工　―　粟田口正吉　―

亀山藩の抱え工であった粟田口正吉。現在知られている作例は非常に少ないものの、茎に切る銘から、亀山城主石川家に抱えられた刀工であることは明らかです。

一方で、その出自は詳しくわかっていません。「粟田口」の名前から、京都刀工の一派である粟田口派の作風を継ぎ、同じく粟田口派を踏襲した粟田口一竿子忠綱の末流とも伝えられています。

ここでは、亀山藩の抱え工である粟田口正吉が作刀した稀少な刀と脇指をその拵とともにご紹介します。

1. ○刀　寛政五年（一七九三）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）勢亀城主石川家鍛工　（裏）寛政五癸丑八月粟田口正吉　［刃長］九七・○cm　［反り］二・二cm

3. 脇指　寛政六年（一七九四）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）勢亀城主家鍛工　（裏）寛政六甲寅二月／粟田口正吉　［刃長］四八・九cm　［反り］一・二cm

2. 金梨地鞘打刀拵

江戸時代

亀山市歴史博物館

4. 黒石目地塗鞘脇指拵

江戸時代

亀山市歴史博物館

2　亀山ゆかりの刀工　―　国助　―

もうひとりの亀山ゆかりの刀工は、初代河内守国助です。初代国助は、伊勢国亀山で生まれたとも伝えられています。山城国の堀川国広を師として学び、大坂に移り、新刀期の始まりの大坂を代表する刀工となり、大坂新刀の祖とも呼ばれています。

二代目河内守国助は、初代の子です。初代と三代の間であることから中河内とも呼ばれています。拳のような形となる拳形丁子という乱刃を考案しました。

また、初代河内守国助の弟は、初代石見守国助を名乗ります。河内守とともに堀川国広に学んだ後、大坂で作刀を始めますが、石見守は伊勢国神戸へ戻り、作刀を続けました。

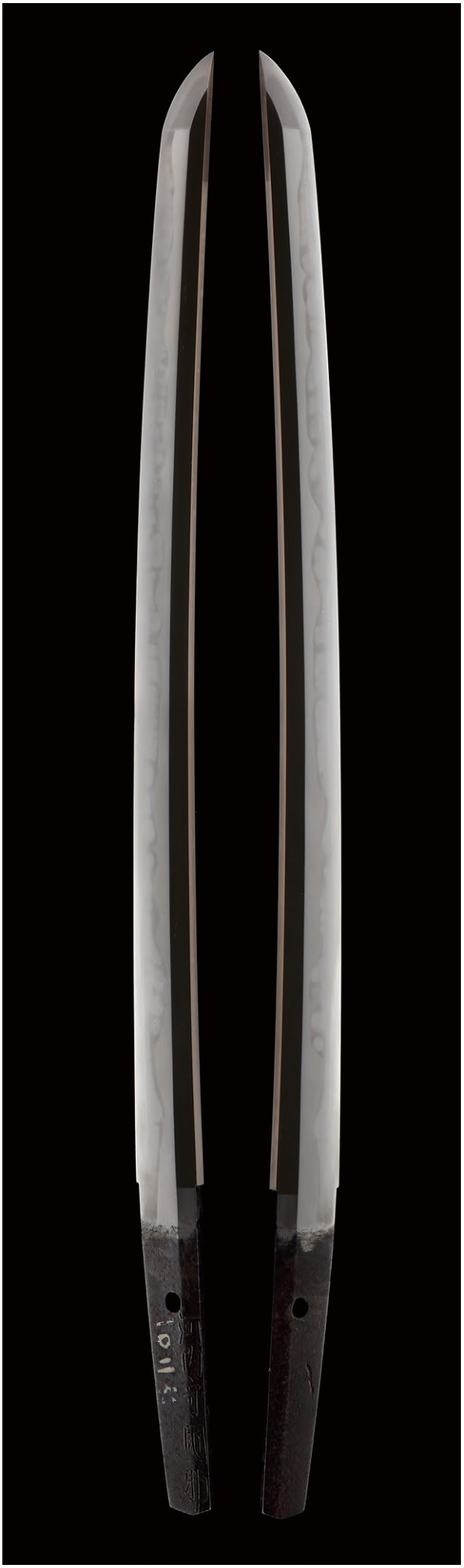
ここでは、初代と二代河内守国助、初代石見守国助の作例をご紹介します。なお、これら五口は全て赤羽刀であり、国から無償譲渡されたものです。

5. 刀　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）河内守国助　［刃長］七三・五cm　［反り］一・〇cm

6. 脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）河内守国助　［刃長］四五・九cm　［反り］〇・六cm

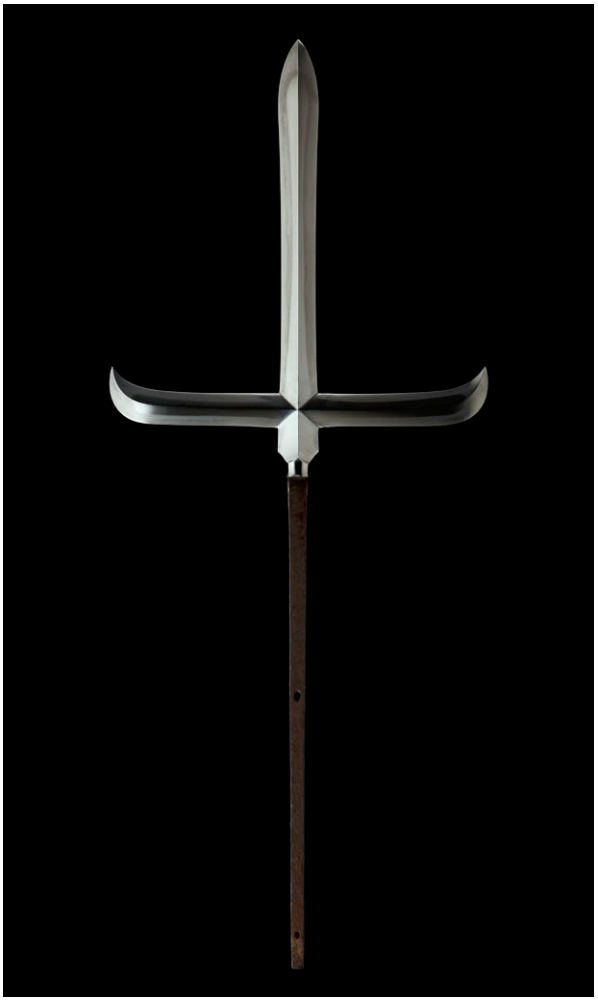


7. 脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）河内守国助　［刃長］三八．五cm　［反り］〇．七cm

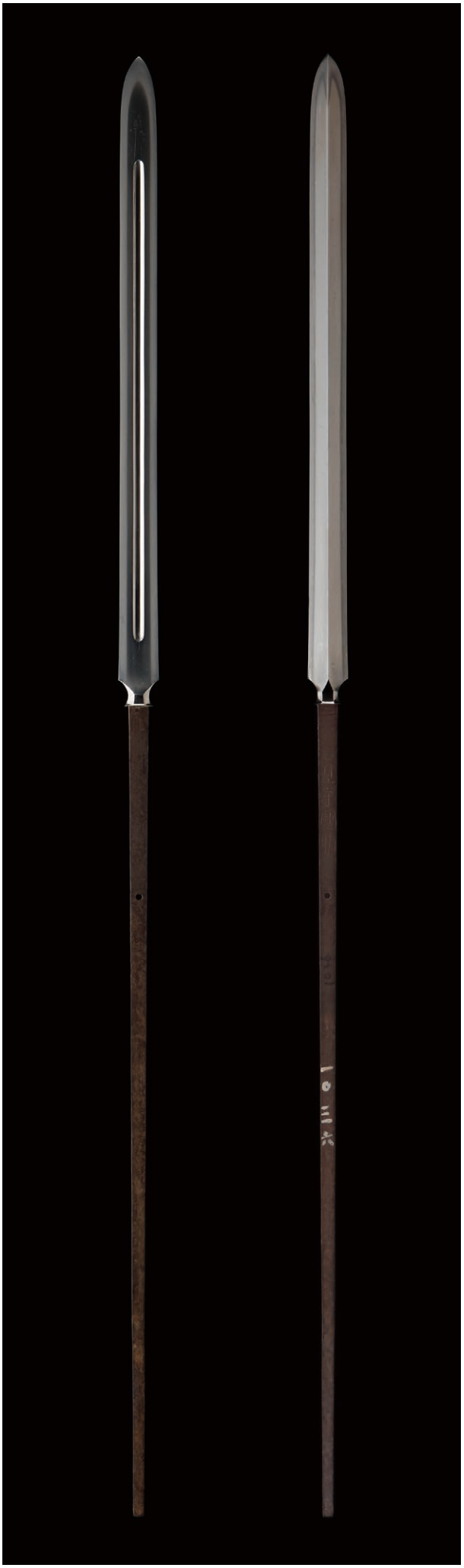
8. 十文字槍　室町時代末期　亀山市歴史博物館

［銘］（表）国助　［刃長］二六・〇cm



9. 槍　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）石見守国助　［刃長］四一・〇cm



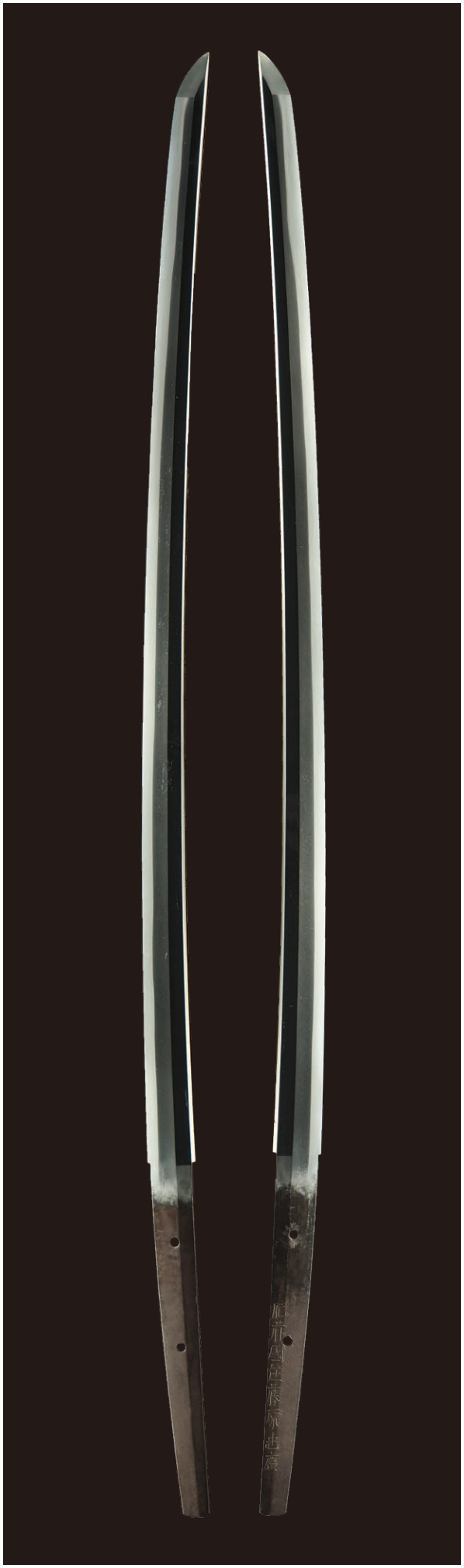
3　亀山藩の武士と刀

江戸時代、刀は武士の身分を表すものでした。ことに、太刀から刀へと変化し、刀と脇指による大小一組の帯刀は、武士の身分を表すものでした。

本コーナーでは、かつて亀山城主石川家に仕えた武士の家に伝来した日本刀、なかでも大小として認識されていた一組をその拵（こしらえ）とともにご紹介します。伝来品をみると、大小一組とはいうものの、刀工（とうこう）が同じ大小もあれば、異なるものもあります。江戸時代の武士たちは、必ずしも同一刀工による刀と脇指を大小一組としていたわけではなく、外装である拵をセットにしたものを、大小であると認識していたのではないかと考えられます。亀山藩の武士が実際に差していたであろう大小の刀身、拵をご覧ください。

10. 刀　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（裏）肥前国住藤原忠広　［刀長］七二・六cm　［反り］一・〇cm



11. 脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）丹波　［刃長］四七・三cm　［反り］一・〇cm

12. 黒蝋色塗鞘大小拵　江戸時代　亀山市歴史博物館

13. 刀　文化十二年（一八一五）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）播州手柄山氏繁造之（裏）応需石川六三源正文而／文化十二年八月日　［刃長］六二・三cm　［反り］二・〇cm

14. 脇指　文化十二年（一八一五）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）手柄山氏繁造之（裏）応需石川六三源正文而／文化十二年八月日　［刃長］三八・九cm　［反り］一・三cm

15. 青貝微塵黒変塗鞘大小拵　江戸時代　亀山市歴史博物館

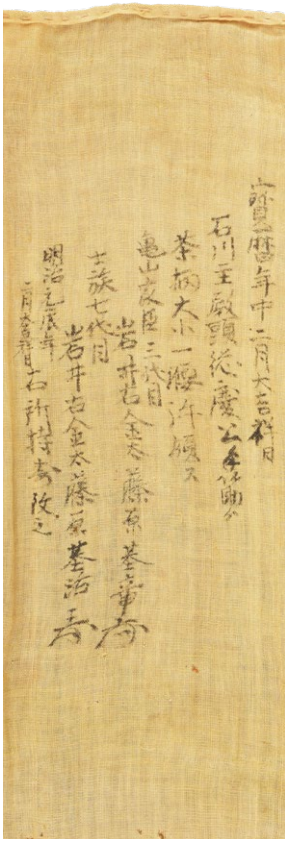
16. 刀袋

明治三十一年（一八九八）　亀山市歴史博物館

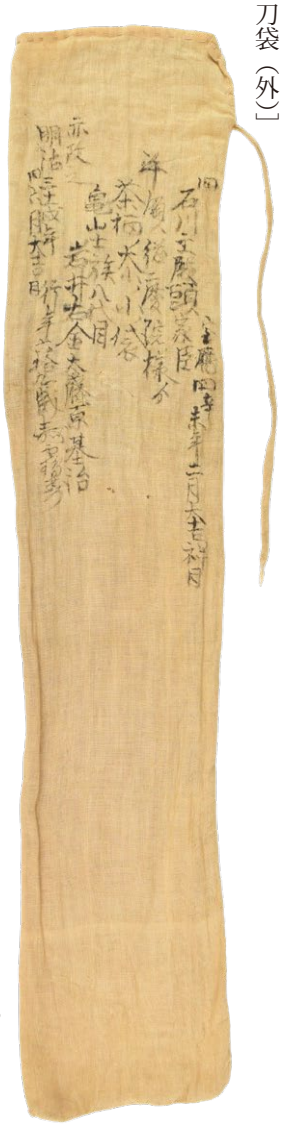
［No.17刀袋（外）］

［No.17刀袋（外）墨書部分］

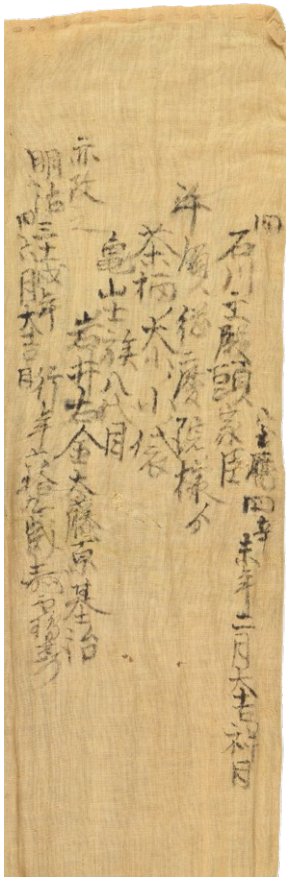
［No.17刀袋（内）墨書部分］



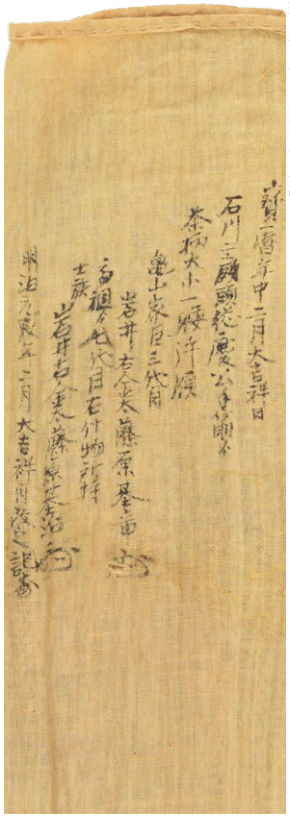
［No.18刀袋（外）］



［No.18刀袋（外）墨書部分］



［No.18刀袋（内）墨書部分］



17. 脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）越前国兼植　［刃長］五九・八cm　［反り］一・六cm

18. 脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］無銘　［刃長］三七・四cm　［反り］一・二cm

19. 青貝微塵黒石目地塗脇指拵・朱変塗鞘脇指拵

江戸時代

亀山市歴史博物館

コラム　亀山の武士が所有した刀剣　～出品資料との比較～

亀山城主石川家の家臣であった加藤家・天野家の文書には、当時、所有していた刀剣類の記録がみられます。そこには、出品している刀剣類と同じ刀工（とうこう）による刀剣類が確認できます。数例ではありますが、出品している刀剣類とは異なるものですので、江戸時代の亀山ではより多くの刀剣類が存在していたことや、当時の武士たちが複数所有した人気作ともいえる作例の可能性を探ることができるかもしれません。

	種　別	刀　　工	出　　典
1	刀	肥前国住近江大掾藤原忠広	（刀剣類書上）（館蔵加藤家文書 25-4-483）
2	刀	手柄山氏繁	
3	脇指	手柄山氏繁	
4	十文字槍	手柄山氏繁	武具馬具並家什蔵書記（館蔵天野家文書 36-1）
5	脇指	河内守国助	
6	刀	河内守国助初代	
7	刀	河内守国助	

4　亀山と赤羽刀

亀山市歴史博物館は、平成十一年（一九九九）、接収刀剣類の譲渡を受けました。接収刀剣類とは、昭和二十年（一九四五）、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が、日本の武装解除の一環として、全国の警察に命じて、国民から接収した刀剣類です。その大部分が廃棄や海外流出したものの、免れたものが、東京都北区赤羽の米第八軍兵器補給廠（ほきゅうしょう）に集められ、昭和二十二年、約五五〇〇口余りが選別され、東京国立博物館で保管されることとなりました。そのため、これらの刀剣類は、「赤羽刀（あかばねとう）」と呼ばれるようになりました。

そして、戦後五十年を迎えた平成七年、旧所有者への返還および残りの刀剣類の国への帰属が決まりました。国が保存・活用するもの以外、全国の公立博物館等への無償譲渡により公開・活用を進めることとなりました。

当館もその一館として、十口の刀剣類の譲渡を受けました。譲渡された刀剣類には、2コーナーで紹介した赤羽刀の国助のように、亀山に関する刀工（とうこう）の作例とともに、伊勢国やその他地域の刀工の作例も含まれていました。本コーナーでは、当館が所蔵する赤羽刀十口のうち、国助以外の五口をご紹介します。

20. 刀　文久四年（一八六四）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）天龍子橘久一作（裏）文久四子年二月日　［刃長］七五・二cm　［反り］一・二cm

21. 脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）勢州桑名住藤原勝吉（裏）於播州姫路作是　［刃長］四六・〇cm　［反り］一・〇cm

22. 脇指　室町時代末期　亀山市歴史博物館

［銘］（表）村正作　［刃長］三五．六cm　［反り］〇．八cm

23. 脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）肥後守国康　［刃長］五一・八cm　［反り］〇・八cm

24. 脇指　室町時代末期　亀山市歴史博物館

［銘］（表）正（広）　［刃長］三一・六cm　［反り］〇・三cm

5　亀山ゆかりの刀装具　―　亀山鐔　貞栄　―

日本刀の外装を刀装（とうそう）といい、その部品が刀装具です。そして、その刀装具のひとつに「鐔（つば）」があります。鐔には、亀山の地名を冠する「亀山鐔」という作品群があります。亀山鐔は、亀山城主であった松平乗邑（のりさと）に抱えられた鐔工（つばこう）の国友（くにとも）派が作鐔（さくたん）したものです。

亀山鐔の特徴は、鉄地の鐔に、文様を彫りくぼめ、そこへ砂張（さはり）とよばれる鉛（なまり）、錫（すず）、銅などの合金を熱で溶かして流し込んだとみられる、流し込み象嵌（ぞうがん）の技法で文様を表現していることです。砂張象嵌を施した部分は、銀色に鈍く光っています。また、象嵌部分は、気泡の跡が残り、独特な印象を与えているように感じられます。

亀山鐔を亀山で作鐔した鐔工には、国友正栄、貞栄のふたりが確かめられます。ここでは、亀山に伝わる貞栄の作例を中心にご紹介します。

国友正栄

亀山で活躍した鐔工の一人目は、国友正栄です。鐔に刻んだ銘文に「勢州亀山住　正栄作」と残されていることから、亀山に住み、作鐔（さくたん）していたことがうかがえます。

なお、「正栄」は、「しょうえい」「まさしげ」「まさよし」「まさたか」など様々な読み方が紹介されています。

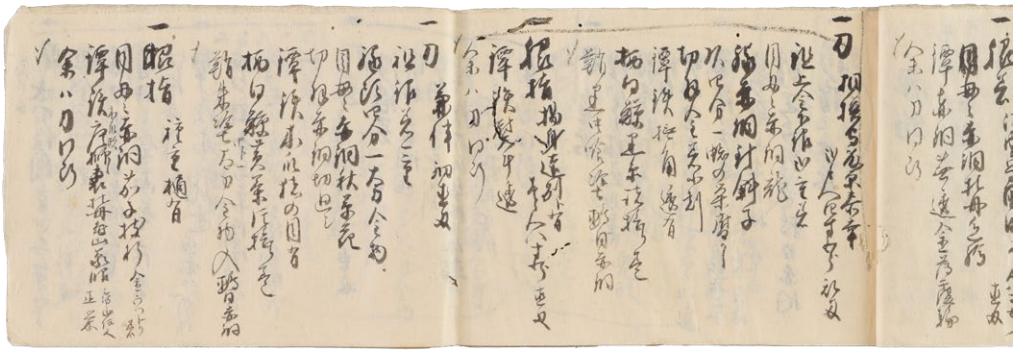
25. 石垣図鐔　江戸時代
名古屋市博物館
［径］八．〇cm

［銘］勢州亀山住／正栄作

26. 葡萄文図鐔　江戸時代
名古屋市博物館
［径］八．〇cm

［銘］勢州於亀山／正栄作

27. 武具馬具並家什蔵書記　天保六年（一八三五）
亀山市歴史博物館



国友貞栄

国友正栄の次に亀山での作鐔（さくたん）がみられる鐔工（つばこう）は、国友貞栄です。貞栄は、藤図鐔〔No.30〕の銘から、元禄十一年（一六九八）に亀山で作鐔していたことがわかっています。

なお、「貞栄」は、「じょうえい」「ていえい」「さだよし」など様々な読み方が紹介されています。正栄と貞栄の関係は明らかではありませんが、「栄」の字を継ぎ、同じ亀山で活躍していたことから、師弟や血縁関係にあったのではないかと想像されます。

28. ○無文鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
〔径〕七．八cm
〔銘〕勢州亀山住／国友貞栄作

29. 笹竹白鷺図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
〔径〕八．四cm
〔銘〕勢州亀山住／国友貞栄作

30. 藤図鐔　元禄十一年（一六九八）
亀山市歴史博物館
〔縦〕八．四cm
〔横〕七．八cm
〔銘〕（表）勢州亀山住／国友貞栄作
〔銘〕（裏）元禄寅年六月朔旦／賀州住
兼若鍛之

31. ○幔幕図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［径］七・五cm

［銘］貞栄作

32. 胡蝶図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［径］八・五cm

［銘］貞栄

33. 唐草図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［径］八・二cm

［銘］貞栄

6　もうひとつの亀山鐔　―　間鐔　―

5コーナーで紹介した亀山鐔の特徴、砂張（さはり）の流し込み象嵌（ぞうがん）という特徴的な技法を用いた鐔には、間鐔（はざまつば）と呼ばれる作例があります。これは、鐔に「間」という鐔工（つばこう）の銘を刻んだものです。ここでは、間鐔とよばれる「間」銘の切られた鐔をご紹介します。

＊亀山鐔と間鐔をみてみると、鐔工の国友派と間派の関係は、明らかではなく、同集団の職人であったとは言いがたいとみています。しかし、特殊な技法が共通していることから、本企画展では、いずれも「亀山鐔」と総称します。

34. ○蛤図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［径］八・六cm

［銘］間

35. ○矢羽松葉図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［径］六・八cm

［銘］間

36. ○象図鐔　江戸時代
個人
［径］八・四cm

［銘］間

37. 俵松葉図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［径］八・二cm

［銘］間

38. 熨斗図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［径］七．七cm

［銘］間

39. 馬具図鐔　江戸時代
亀山市歴史博物館
［縦］八．二cm
［横］七．八cm

［銘］間

表１　亀山在城以後の松平家と国友派対応表

城地	在城期間	松平家	高	国友銘	作鐔地銘
亀山城 （三重県亀山市）	宝永７年（1710）正月 26 日 ～ 享保２年（1717）11 月朔日	乗邑（のりさと）	６万石	正栄 貞栄	勢州亀山住 勢州於亀山 勢州亀山住
淀城 （京都府京都市）	享保２年（1717）11 月朔日 ～ 享保８年（1723）５月朔日	乗邑	６万石	貞栄	城州於淀
佐倉城 （千葉県佐倉市）	享保８年（1723）５月朔日 ～ 延享３年（1746）正月 23 日	乗邑 乗佑（のりすけ）	６万石 後７万石 ６万石	貞栄 命明	（総州於佐倉） 於総州佐倉
山形城 （山形県山形市）	延享３年（1746）正月 23 日 ～ 明和元年（1764）６月 21 日	乗佑	６万石	正命	於羽州山形
西尾城 （愛知県西尾市）	明和元年（1764）６月 21 日 ～	乗佑	６万石	正命	於三州西尾
	以下明治まで西尾城主	以下 乗完（のりさだ） 乗寛（のりひろ） 乗全（のりやす） 乗秩（のりつね）		以下 正幸 正重 重貞 貞重 （または重信） 重信 （または貞重）	 三州西尾 （於三州西尾） 松平家の分限帳に記されている金具師国友宮五右衛門・国友釧之助と考えられている。

（亀山市歴史博物館『開館一周年記念特別展　亀山鐔と松平乗邑時代の亀山藩』1995 より）

表２　亀山鐔　国友派（正栄・貞栄）・間派の特徴

	国友派（くにとも）（正栄・貞栄）	間派（はざま）
銘	名・氏名・作鐔（さくたん）地	「間」のみ
技法	砂張象嵌（さはりぞうがん）	砂張象嵌
デザイン	象嵌で文様を表現 鐔の表裏を意識したデザイン	鐔地からはみでる・ 余白を効果的に用いるといった高いデザイン性

1．○刀　亀山市歴史博物館

［銘］（表）勢亀城主石川家鍛工

（裏）寛政五癸丑八月粟田口正吉

地鉄は、木材の板のような模様が細かく詰んだ小板目肌。刃文は、直線的な刃文を主とするものの、中に小さな丁子文が交じる、直刃調に小丁子乱れ交じり。そして、刃文のなかに白い砂粒のような大きさで白く輝く微粒子がみられる沸出来です。寛政五年（一七九三）という江戸時代後期の作刀ではあるものの、粟田口派の特徴をふまえた作風と評価されます。

また、刃長九七．○cmという長大な長さは、実用品というよりも奉納品として作刀されたのではないかと考えられます。

2．金梨地鞘打刀拵　亀山市歴史博物館

寛政五年粟田口正吉銘の刀〔No.1〕の拵です。鞘の全面に金梨地塗を施し、白色柄巻の下には、象嵌を施した薙刀と軍杖の意匠の目貫を装着しています。

3．脇指　亀山市歴史博物館

［銘］（表）勢亀城主家鍛工

（裏）寛政六甲寅二月／粟田口正吉

寛政五年粟田口正吉銘の刀〔No.1〕と同じ特徴を持つ脇指です。銘文によれば、刀の作刀から半年後に脇指を作ったことになります。同じく粟田口正吉による作例ですが、茎の銘には違いがみられます。自らの肩書きを、刀では「勢亀城主石川家鍛工」、脇指では「勢亀城主家鍛工」としています。脇指では、銘を切る茎の長さにあわせたものかとも思われますが、抱える主「石川」家の家名がありません。また、裏銘の「粟田口」の「粟」の切り方も、刀と脇指で「米」の形が異なっていることは注目されます。

4．黒石目地塗鞘脇指拵　亀山市歴史博物館

寛政六年粟田口正吉銘の脇指〔No.3〕の拵です。黒石目地塗の鞘に、小柄が収められています。柄巻の下には、兜の意匠の目貫を装着しています。

5．刀　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）河内守国助

刃文と地鉄の境目である匂口がよく表れた刀です。地鉄は小板目肌、拳形丁子の交じった互の目丁子乱れとみえる華やかな刃文が特徴的です。二代河内守国助の作刀とみられます。

なお、茎尻が切りとなっていることから、刀身を短く仕立て直す磨上を行ったものと考えられます。

6．脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）河内守国助

地鉄は小板目肌、拳形丁子の交じった互の目丁子乱れとみえる刃文がうかがえます。また、大坂新刀の特徴のひとつである、大坂焼き出しがみられます。大坂焼き出しは、刃区（刀身と茎の境目で刃側の部分）からやや長めの直刃の焼き出しで始まり、途中で乱刃に変わる刃文です。

大坂新刀とは、新刀期（慶長元年（一五九六）～安永十年（一七八一））に大坂を中心に活動した刀工の作品のことです。河内守国助の刀と脇指三点〔No.5～7〕は、いずれも大坂焼き出しです。本作も、二代河内守国助の作刀ではないかとみられます。

7．脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）河内守国助

表・裏ともに刀身に溝が彫られており、これを樋といいます。表は細い樋を平行に二本掻いた二筋樋、裏は刀身の茎寄りに一本の樋、腰樋が掻かれています。こちらも、二代河内守国助の作刀とみられます。

8．十文字槍　室町時代末期　亀山市歴史博物館

［銘］（表）国助

槍身の両側に左右対称の枝刃が付き、枝刃はともに上に湾曲した姿の十文字槍です。表・裏ともに鎬造となった両鎬造十文字槍となっています。また、目釘穴がふたつあけられており、茎の下方の穴は、実際に使用した際に目釘が折れた場合に備え、予備としてあけられたもので、控え目釘穴と呼ばれるものです。本作は、初代河内守国助のものとみられます。

9．槍　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）石見守国助

断面が二等辺三角形となる平三角槍です。槍の刀身部分である穂が長く、大身槍と呼ばれます。裏は、平地に棒樋が掻かれています。本作に銘を切る石見守国助は、初代河内守国助の弟と伝えられています。

10．刀　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（裏）肥前国住藤原忠広

刀工銘は裏銘で、受領銘なく「肥前国住藤原忠広」と切っています。地鉄は小さな粒がキラキラと光るように地沸がついた肌で、肥前刀の特徴を表しています。刃文は直刃にわずかに湾れがまじっています。二代忠広の作刀ではないかとみられます。

11．脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）丹波

筋状の焼刃が刀身の縦方向にみられる、簾刃という特徴的な刃文がみられます。簾刃は、丹波守吉道が考案したものと言われます。磨上により、茎の銘は「丹波」のみとなっ

ていますが、丹波守吉道の作例ではないかとみられます。

12．黒蝋色塗鞘大小拵　江戸時代　亀山市歴史博物館

藤原忠広銘の刀〔No.10〕と丹波銘の脇指〔No.11〕の拵です。刀と脇指の拵をあわせて一組とした、大小拵となっています。脇指の拵には小柄が収められ、小柄の穂先には、「手柄山氏繁」銘が刻まれています。

13．刀　文化十二年（一八一五）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）播州手柄山氏繁造之

（裏）応需石川六三源正文而／文化十二年八月日

五代手柄山氏繁の作刀とみられます。大きな波が打ち寄せるような濤瀾乱刃と刃中にあらわれた白い砂粒のような沸がみえる刀です。

茎に切られた銘にあるとおり、亀山城主石川家の家臣であった石川家の石川正文が注文し、作刀されたものです。石川家の系図によれば、正文は、成庸の次男として生まれ、大月関平の門下で武芸を学んだ武に秀でた人物であったようです。

14．脇指　文化十二年（一八一五）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）手柄山氏繁造之

（裏）応需石川六三源正文而／文化十二年八月日

No.13の刀と同じく五代手柄山氏繁による脇指とみられます。刀と脇指を一組とし、大小として氏繁に注文したものです。

15．青貝微塵黒変塗鞘大小拵　江戸時代　亀山市歴史博物館

手柄山氏繁銘の刀〔No.13〕と脇指〔No.14〕を収めた大小拵です。刀と脇指の拵でありながら、太刀拵の飾り金具を施した半太刀拵となっています。脇指を収めた拵は、国広銘を刻む鉄鐔を装着しています。いずれの鞘も、青貝を細かく砕いた装飾がなされ、美しく輝いています。

16．刀袋　明治三十一年（一八九八）　亀山市歴史博物館

拵〔No.19〕に収められた脇指、兼植〔No.17〕と無銘〔No.18〕の二口が、それぞれ収められていた刀袋二袋です。刀袋の墨書銘から、宝暦元年（一七五一）、亀山城主の石川総慶から拝領し、代々岩井家で引き継がれてきた大小であることがわかります。特徴として「茶柄大小」とあり、柄を茶色に統一することで、二口を一組の大小とみなしたのではないかと考えられます。

［No.17刀袋墨書（外）］

旧石川主殿頭総慶院様ゟ
拝領
茶柄ノ大小ノ大
宝暦元辛未年二月大吉祥日

［No.17刀袋墨書（内）］

宝暦年中二月大吉祥日
石川主殿頭総慶公手筋ゟ
茶柄大小一腰拝領ス
亀山家臣三代目
岩井右金太藤原基章（花押）
士族七代目
岩井右金太藤原基治（花押）
明治元辰年二月大吉祥日　右所持す改之

［No.18刀袋墨書（外）］

宝暦四（元）辛未年二月大吉祥日
旧石川主殿頭家臣
拝領総慶院様ゟ
茶柄ノ大小ノ小ノ袋
亀山士族八代目
亦改之　岩井右金太藤原基治
明治三十一戊年　行年六拾九歳■（花押カ）鶴寿
旧六月大吉日

［No.18刀袋墨書（内）］

宝暦年中二月大吉祥日
石川主殿頭総慶公手筋ゟ
茶柄大小一腰拝領
亀山家臣三代目
岩井右金太藤原基章（花押）
高祖ゟ七代目右什物所持
士族岩井右金太藤原基治（花押）
明治元辰年二月大吉祥日改之記す

17．脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）越前国兼植

越前国兼植と銘を切ります。刃中は互の目乱れになり、地中に焼刃が点在する飛焼を施す刃文がみられます。

18．脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］無銘

横手筋がなく、鎬筋が茎から鋒まで通る造込みである、菖蒲造となっています。ゆったりとした波のような湾れの刃文に、地鉄の板目肌もみられます。

19．青貝微塵黒石目地塗脇指拵・朱変塗鞘脇指拵　江戸時代　亀山市歴史博物館

兼植銘の脇指〔No.17〕と無銘の脇指〔No.18〕を収めた拵です。いずれも脇指ですが、刀袋〔No.16〕によると、大小とみなしていました。

兼植銘の脇指は、石目地塗の上に砕いた青貝が散らされ、五分ごとに刻みが見られる印籠刻み風の鞘に収められています。拵に収められた笄には、茶道具図があしらわれています。

無銘の脇指は、朱色の変塗りの鞘に収められ、その拵に収められた小柄の穂先には、「金華　長良川川邊（山麓）□□」との銘が刻まれ、岐阜で活躍した刀工の手によるものかとみられます。

兼植、無銘いずれの拵も、半太刀拵とし、下緒は、組紐の打ち方を工夫し、「武運長久」と文字がでるよう組まれた高麗組が用いられています。

20．刀　文久四年（一八六四）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）天龍子橘久一作　（裏）文久四子年二月日

板目肌に細かな丁子の刃文がはっきりとみられます。茎に切られた銘から、文久四年（一八六四）に天龍子橘久一が作刀したものとわかります。橘久一は、越後国片貝から伊勢国山田へ移り住み、作刀した刀工です。

21．脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）勢州桑名住藤原勝吉　（裏）於播州姫路作是

均整のとれた直刃がみられます。茎に切られた銘から、藤原勝吉の手によるものとわかります。勝吉は、千子正重の門人の刀工で、初代が桑名に住んでいました。桑名城主本多家が姫路に移るのにともない、姫路へと移り住み、作刀を続けました。なお、勝吉の師である正重は、初代村正の子ともいわれており、勝吉も村正の系譜を引いているといえます。

22．脇指　室町時代末期　亀山市歴史博物館

［銘］（表）村正作

刀身に鎬筋を立てない平面の造込みである平造です。刀身には樋が一本掻かれています。鋒の刃文は、鋒の下部あたりからのたれ、刃先に向かって丸みを帯び、刃先で丸く返る地蔵帽子となっています。茎には「村正作」との銘が切られていますが、今後の研究が必要です。

23．脇指　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］（表）肥後守国康

茎に「肥後守国康」と銘が切られています。初代肥後守国康は、初代河内守国助の三男で、二代河内守国助の弟にあたります。二代国助の刃文と似た、拳形丁子を交えた互の目丁子乱れとみえる刃文がみられます〔№5・6〕。焼き出しも、刃区から長めの直刃で始まる大坂焼き出しとなっており、同じ特徴がうかがえます。

24．脇指　室町時代末期　亀山市歴史博物館

［銘］（表）正（広）

刀身に鎬筋を立てない平面の造込みである平造です。刃文は刀身全体に焼き入れを行い、網状の文様で埋め尽くす皆焼となっています。茎には「正広」と銘が切られていますが、「広」は文字の半分ほどが切断によってなくなっています。目釘穴が三つあることや、刀工銘が切られていることからも、茎を切って長さを調整する磨上が行われたことがわかります。

25．石垣図鐔　江戸時代　名古屋市博物館

［銘］勢州亀山住／正栄作

石垣の文様を刻んでいます。砂張象嵌を用いないシンプルな作品です。

26．葡萄文図鐔　江戸時代　名古屋市博物館

［銘］勢州於亀山／正栄作

葡萄の実・葉・ツルの文様です。文様は、亀山鐔の特徴である砂張象嵌によるものです。

27．武具馬具並家什蔵書記　天保六年（一八三五）　亀山市歴史博物館

亀山城主石川家の家臣の天野家が所有していた武具・馬具・什器・蔵書などの台帳です。所有する脇指「種重」の鐔として、亀山鐔が登場します。記録によれば、木瓜形をした鉄地の鐔に、表は唐獅子、裏に牡丹の文様を「亀山象眼」で表したものです。

「亀山象眼」とは、砂張「象嵌」の技法を用いた「亀山」鐔という意味ではないかと考えられます。また、鐔工は、「亀山住人　正栄」とありますので、国友正栄です。亀山鐔の所持や文様を記録した当時の文書がほとんど確認されないなかで、亀山藩の武士が亀山鐔を所有していたことがわかる貴重な資料です。

［「亀山象眼」関係部分］

一　脇指　種重樋有

目貫　赤銅茄子枝折金ウツトリ着

鐔鉄　木瓜形　唐獅し　裏牡丹　亀山象眼亀山住人正栄

余ハ刀同断

28．○無文鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］勢州亀山住／国友貞栄作

文様がなく、国友貞栄の鐔工銘のみの丸形鉄鐔です。ふたつの櫃孔が心葉形のような形をしています。正栄による石垣図鐔〔№25〕と同様、砂張象嵌を用いない亀山鐔の一例です。

29．笹竹白鷺図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］勢州亀山住／国友貞栄作

表は笹竹、裏は芦と鷺を砂張象嵌で表しています。表の笹竹の象嵌部分には大きな気泡の跡が目立っています。

30．藤図鐔　元禄十一年（一六九八）　亀山市歴史博物館

［銘］（表）勢州亀山住／国友貞栄作

（裏）元禄寅年六月朔旦／賀州住兼若鍛之

表には、砂張象嵌で藤の文様を施しています。また、表・裏ともに、茎孔の左右に銘を刻んでいます。表は、国友貞栄の鐔工銘、裏には、元禄年号とともに鍛造者名が確認できます。「賀州住兼若」は、新刀の刀工として確認できますので、刀工が鍛えた鐔地に貞栄が加工を施したのではないかと考えられます。

31. ○幔幕図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］貞栄作

茎孔と小柄櫃孔のみの鐔です。表・裏ともに桔梗文の幔幕を表しています。

本作は、本体は茶色い銅の鋳造で作られ、幕の耳は黒く発色した赤銅、柱は素銅で赤く表しています。多様な色を用いており、亀山鐔に共通する鉄鐔に銀色に鈍く光る砂張象嵌を施すものとは異なっています。また、鐔の縁は金銅の覆輪がめぐり、鑢がかけられています。

32. 胡蝶図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］貞栄

表に羽をとじた姿、裏に羽を広げた姿の蝶を砂張象嵌で表しています。

33. 唐草図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］貞栄

表・裏ともに、唐草文様は、砂張象嵌による線象嵌です。細い線を流し込み象嵌で表現する高い技術がうかがえます。文様を線象嵌のみで表現している点も、他の作品とは異なっています。また、表と裏を意識し、唐草の粗密に差をもたせていることも注目されます。

34. ○蛤図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］間

蛤の貝殻を少しずらして表し、鐔からはみ出るようにデザインする特徴的な表現がなされています。貝殻は、鉄地の上に赤銅を重ねて、赤銅独特の黒色で表され、貝殻の内側は砂張象嵌で表現されています。また、茎孔のみで、櫃孔を設けない形をとっています。

35. ○矢羽松葉図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］間

矢の上部につける羽である矢羽と松葉を砂張象嵌で表します。鐔からはみ出すように配置しつつも、鐔地全面に描くことなく余白を取るバランス感覚に優れたデザインで表現されています。

36. ○象図鐔　江戸時代　個人

［銘］間

表に象、裏には笠と太鼓とみられる文様を砂張象嵌で表現しています。表は象の目と牙を、裏も笠の一部を金銅で表現することで、デザインにアクセントを加えています。

日本への象の渡来は、何度かありました。そのうち、享保十三年（一七二八）に日本へやって来た象は、翌年、長崎から行列を組んで、江戸へと向かいました。この象行列は、象ブームを巻き起こしたといわれていますので、その影響を受けた作品とも考えられます。

37. 俵松葉図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］間

本体は、茶褐色の銅を用い、表に松葉、裏に俵を表しています。俵は、黒色の赤銅を用いて立体的に表現されています。鐔の形状も、俵の膨らみにあわせて、中心部から盛り上げ、縁にむかってなだらかに低くなっています。

茎孔は、三角形であったものを長方形となるよう変形を加えたものと思われます。そのため、孔の右側に刻まれる「間」銘の左部分が欠けています。

なお、鐔工の在銘面を表としましたが、文様からみると俵図面を表とみることができる作品です。

38. 熨斗図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］間

鐔からはみ出すようにデザインされた熨斗文様が特徴的です。熨斗は、贈答品に添える飾りで、熨斗をモチーフにした熨斗文様は、吉祥文様として好まれたものです。

本作例では、熨斗を砂張象嵌で表していますが、象嵌が他の作品のような銀色というより黒く見え、他の象嵌とは様子が異なっています。

39. 馬具図鐔　江戸時代　亀山市歴史博物館

［銘］間

木瓜形の鐔の全面に馬具をデザインしています。表は面懸の房、裏は轡を砂張象嵌で表しています。裏面の轡には、手綱がつながれ、鐔の外へと飛び出すようにデザインされています。

6．もうひとつの亀山鐔　― 亀山鐔　間 ―					
34	○	蛤図鐔	間	江戸時代	亀山市歴史博物館
35	○	矢羽松葉図鐔	間	江戸時代	亀山市歴史博物館
36	○	象図鐔	間	江戸時代	個人
37		俵松葉図鐔	間	江戸時代	亀山市歴史博物館
38		熨斗図鐔	間	江戸時代	亀山市歴史博物館
39		馬具図鐔	間	江戸時代	亀山市歴史博物館

主 な 参 考 文 献

佐藤寒山編『伊勢の刀工』、日本美術刀剣保存協会三重支部、1963
本間薫山・佐藤寒山監修『新版日本刀講座　第４巻　新刀鑑定編』、雄山閣出版、1966
三重県警察本部警務部警務課『三重県警察史』第３巻、1966
小笠原信夫「大坂新刀鍛冶 河内守国助考」（『Museum197』、東京国立博物館編）、1967
石井昌国編『日本刀銘鑑』、雄山閣出版、1976
矢ケ瀬清一『三重県の刀工』、三重県郷土資料刊行会、1976
田畑徳鴦『三重県刀工・金工銘鑑』、三重県郷土刊行会、1989
荒敬「占領軍の「刀狩り」―民間の武装解除」『日本占領史研究序説』、柏書房、1994（初出 1991）
亀山市歴史博物館『開館一周年記念特別展　亀山鐔と松平乗邑時代の亀山藩』、1995
文化庁文化財保護部美術工芸課『赤羽刀（接収刀剣類）』
藤木久志『刀狩り（岩波新書）』、岩波書店、2005
久保智康「工芸」（『亀山市史　美術工芸編』、亀山市・亀山市歴史博物館編）、2011
三重県編『三重県史　別編　美術工芸（解説編）』、2014
内藤直子『”超絶技巧”の源流　刀装具』、淡交社、2017
内藤直子監修・著、吉原弘道著『もっと知りたい刀剣　名刀・刀装具・刀剣書』、東京美術、2018
桑名市博物館『特別企画展　三重刀剣紀行　―甦る村正の煌めき―』、2020
歴史群像編集部編『図解日本刀事典』、ワン・パブリッシング、2021
板橋区立郷土資料館『開館 50 周年記念特別展　接収刀剣　―板橋に集いし赤羽刀―』、2022
刀剣ワールド（https://www.touken-world.jp/）

掲　載　資　料　一　覧

番号		資料名	銘文	時代	所蔵
1．亀山ゆかりの刀工　― 粟田口正吉 ―					
1	○	刀	（表）勢亀城主石川家鍛工 （裏）寛政五癸丑八月粟田口正吉	寛政５年（1793）	亀山市歴史博物館
2		金梨地鞘打刀拵		江戸時代	亀山市歴史博物館
3		脇指	（表）勢亀城主家鍛工 （裏）寛政六甲寅二月／粟田口正吉	寛政６年（1794）	亀山市歴史博物館
4		黒石目地塗鞘脇指拵		江戸時代	亀山市歴史博物館
2．亀山ゆかりの刀工　― 国助 ―					
5		刀	（表）河内守国助	江戸時代	亀山市歴史博物館
6		脇指	（表）河内守国助	江戸時代	亀山市歴史博物館
7		脇指	（表）河内守国助	江戸時代	亀山市歴史博物館
8		十文字槍	（表）国助	室町時代末期	亀山市歴史博物館
9		槍	（表）石見守国助	江戸時代	亀山市歴史博物館
3．亀山藩の武士と刀					
10		刀	（裏）肥前国住藤原忠広	江戸時代	亀山市歴史博物館
11		脇指	（表）丹波	江戸時代	亀山市歴史博物館
12		黒蝋色塗鞘大小拵		江戸時代	亀山市歴史博物館
13		刀	（表）播州手柄山氏繁造之 （裏）応需石川六三源正文而／文化十二年八月日	文化 12 年（1815）	亀山市歴史博物館
14		脇指	（表）手柄山氏繁造之 （裏）応需石川六三源正文而／文化十二年八月日	文化 12 年（1815）	亀山市歴史博物館
15		青貝微塵黒変塗鞘大小拵		江戸時代	亀山市歴史博物館
16		刀袋		明治 31 年（1898）	亀山市歴史博物館
17		脇指	（表）越前国兼植	江戸時代	亀山市歴史博物館
18		脇指	無銘	江戸時代	亀山市歴史博物館
19		青貝微塵黒石目地塗脇指拵・朱変塗鞘脇指拵		江戸時代	亀山市歴史博物館
4．亀山と赤羽刀					
20		刀	（表）天龍子橘久一作 （裏）文久四子年二月日	文久４年（1864）	亀山市歴史博物館
21		脇指	（表）勢州桑名住藤原勝吉 （裏）於播州姫路作是	江戸時代	亀山市歴史博物館
22		脇指	（表）村正作	室町時代末期	亀山市歴史博物館
23		脇指	（表）肥後守国康	江戸時代	亀山市歴史博物館
24		脇指	（表）正（広）	室町時代末期	亀山市歴史博物館
5．亀山ゆかりの刀装具　― 亀山鐔　貞栄 ―					
25		石垣図鐔	勢州亀山住／正栄作	江戸時代	名古屋市博物館
26		葡萄文図鐔	勢州於亀山／正栄作	江戸時代	名古屋市博物館
27		武具馬具並家什蔵書記		天保６年（1835）	亀山市歴史博物館
28	○	無文鐔	勢州亀山住／国友貞栄作	江戸時代	亀山市歴史博物館
29		笹竹白鷺図鐔	勢州亀山住／国友貞栄作	江戸時代	亀山市歴史博物館
30		藤図鐔	（表）勢州亀山住／国友貞栄作 （裏）元禄寅年六月朔旦／賀州住兼若鍛之	元禄 11 年（1698）	亀山市歴史博物館
31	○	幔幕図鐔	貞栄作	江戸時代	亀山市歴史博物館
32		胡蝶図鐔	貞栄	江戸時代	亀山市歴史博物館
33		唐草図鐔	貞栄	江戸時代	亀山市歴史博物館

謝　辞

本企画展の開催および図録の作成にあたり、左記の方々ならびに多くの皆様からご教示、ご協力を賜りました。ここに記して改めてお礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

伊佐地享
資料所蔵者
内藤直子
名古屋市博物館
山木田時夫

〔展示〕

第四十一回企画展
「きらめく亀山刀剣鐔　―国助・正吉・国友・間―」
会期　令和五年九月三十日（土）～十二月十日（日）
会場　亀山市歴史博物館　企画展示室
主催　亀山市歴史博物館
助成　公益財団法人　岡田文化財団

〔関連事業〕

企画展講座
中川由莉（亀山市歴史博物館　学芸員）
「亀山に伝わる刀剣・亀山鐔　～その歴史をひもとく～」
令和五年十月二十九日（日）

企画展講演会
内藤直子（大阪歴史博物館　学芸第一係長）
「一歩近づく刀剣・刀装具」
令和五年十一月三日（金・祝）

刀剣体験・鑑賞会
「模造刀で仕組みを知ろう　～太刀と刀～」
令和五年十一月十九日（日）

第四十一回企画展
「きらめく亀山刀剣鐔
―国助・正吉・国友・間―」
発　行　亀山市歴史博物館
〒五一九―〇一五一
三重県亀山市若山町七番三十号
発行日　令和五年九月三十日